



2021年夏に開かれた東京五輪において世界的に大きな注目を浴びたある出来事があった。それは、ある選手が母国に帰国せずに第三国に亡命したことである。当該選手の帰国時の空港で日本人警察官に翻訳アプリを用いて亡命の意思を訴えたことが報じられ、このような重大事案を翻訳したアプリの力に感銘を覚えた。最近の科学技術の発展のなかでも、(深層学習を含む)機械学習とビッグデータを組み合わせた人工知能の活用は目を見張るものがある。そのなかで計算言語学という分野の知識が自動翻訳など自然言語処理の進歩をもたらしている。今回の五輪でもこの分野の発展の有用性の一端が示されたが、今後もとどまることなく続くことになると思う。

著者は20年以上前にストックホルムへの留学経験があり、1998年に開かれた長野オリンピックのTV報道をストックホルムでみた。競技の報道以外に通常の日本の状況を報告した番組があり、日本ではいかに外国語(英語)が通じないかが報じられていた。そのなかで、スウェーデン人記者が日本人に英語で話しかけ、対応する複数の日本人の困惑する姿があった。自分自身も留学の際、スウェーデン語の情報を得るのに苦労した。そして結果的に十分な情報を得られなかったことを心残りに思っていた。例えば、スウェーデン語の新聞には時に精神医学に関する記事が掲載されていて、ある大きな建物の写真の記事に精神科医療に関係するものがあり、知り合いのスウェーデン人に聞くと、閉鎖された大きな精神科病院の写真であり、スウェーデンの精神科医療では病院から地域への流れがあることを知った。またある時は写真の人物がインタビューに答えて精神疾患の話をしていることを教えてもらったりしたが、十分にその内容を理解したとは言えなかったと思う。最近ではGoogle翻訳などを使うことによって、スウェーデン語の情報が日本語に変換できる。以前に比べさまざまな情報を得ることができるようになっており、今後は英語圏以外の留学の際などにも大きな助けになると感じている。

さて、精神医学の分野では症状を記載する際の言葉が大切な意味をもつが、今日の翻訳機能の発展によって相互変換が可能な反面、歴史的に受け継がれた文化や風土による影響を強く受けることにも目を向け続けていくことが必要である。例えば、不安や恐怖という精神症状に関して、DSM-5の解説書ではさまざまな文化圏における複数の概念を紹介している。例えば、カイヤル発作(Khyal cap)について、カンボジア人は、体のなかの血液と「風(khyal)」の巡りが悪くなると壊滅的な症状が起こると考え、カンボジアでは胃腸の異常感覚(abdominal wind syndrome)からも同様のKhyal発作が起こるとしている。その他、北アメリカでは過度の不安を感じる時にbutterflies in the stomachと表現し、カリブ海諸島からのラテン系移民において報告されている苦痛としてataque de nervious(attack of nerves)がある。これらは不安発作を表す用語であるが文化間での違いを反映する1つの例であると思う。

本学会誌は2021年よりリニューアルされたが、本誌においては和文誌という特徴を生かし、特有の文化や言葉に基づく知見やさまざまな場で得られた臨床的所見を記録した論文を残していくための1つの媒体として機能するとよいように思われる。本誌に掲載された論文やさまざまな記事は後々まで残るものであり、人工知能が関与する自動翻訳が発展する将来、有用な知見ないし論文は日本語という言葉の障壁を越えて、世界の人々の目に触れ、そして再評価をされる未来もあると思う。そのような可能性を含めて、願わくは引用に値し、後世の評価に耐えるものが積み重ねられていってほしい。人類にとって有用な書が何十世紀という時を超えてわれわれに伝わっているように言葉は朽ちることなく永遠に残る力をもつ。論文や諸報告を吟味し、精練していく作業が、将来には国境を越えて大切なメッセージを紡いでいく、その一助になっていけばと思う。

谷井久志